

題目 前期草双紙史の再構築

草双紙は18世紀に江戸で生まれ、毎年正月に新板が刊行された絵入りの小説類である。縦約18cm、横約13cmの中本体裁で、表紙には1枚ないし2枚の題簽を有し、表紙の色に拠って、赤本、黒本、青本のように分類される。

従来の文学史では、刊行された年の1年間のみ読書対象となり、赤本、黒本、青本の順に発生し、内容も幼童向けの単純なストーリーから次第に複雑なものへと変化してページ数も増加し、それに伴って読者層も年長者へと変化したとされてきた。表紙の色は、年代や質の変化に対応しているという前提の下、各年代の文学ジャンルを指す用語として使用されている。また、大田南畝の草双紙評判記『菊寿草』の序文には、安永4年(1775)恋川春町画作『金々先生栄花夢』の登場によって、以降草双紙が大きく変質したとの記事がある。これを受けて、文学史では本作以降の草双紙が教養ある大人が読むに堪えるだけの文学性を有するようになったとして、「黄表紙」と呼び、区別する。このように、草双紙は発生以来、装丁を順に変化させ、また、質的に発展していったという認識が存在しており、『菊寿草』が示した前提の下で研究がなされてきた。しかしながら、実際、手に取ることのできる原資料と従来の認識との間には齟齬が生じており、二次的資料である『菊寿草』の記述を前提として各作品を評価・整理していくことは、草双紙の正確な評価につながっていないと推定される。

そこで本研究は、『菊寿草』序文の記事について、本文中に示された、物語の題材、趣向および装丁の問題を軸として検証する。その主な検証結果として、以下の4点を示す。

- 1 『菊寿草』序文が示した草双紙の歴史展開は、草双紙の中でも主に鱗形屋板について言及したもので、草双紙全般を捉えたものではないこと。

- 2 『菊寿草』序文の記事内容は事実を反映させてはいても一部正確性を欠くこと。  
また、その誤った記事が他の草双紙作者の作品に影響を与え、それが現在の草双紙の定義につながっていること。
- 3 赤本・黒本・青本という三つの装丁の草双紙が、年代順に展開されたのではなく、同時並行的に刊行された時期が一定期間あったこと。大田南畝が示した、赤本、黒本青本、黄表紙という草双紙の歴史的展開や、赤本が子どもの読み物であったという位置づけは、寛延2年（1749）生まれの南畝の、成長に伴った読書遍歴の影響を受けている可能性が考えられること。よって、草双紙は草創期以来、あらゆる要素を持ち合わせていたと考えられ、次第に子ども向けから大人向けへと成熟し、文学としての質を高めていったとはいえないこと。
- 4 草双紙は毎年正月に1度のみ刊行された、いわば読み捨ての文学とはいえないこと。初期草双紙については、原装を留めた伝本の多くが、実は再摺本であること。また、再摺本を含めた上で草双紙の享受を想定すると、従来の、草双紙は次第に質を高めていったという前提が成立しないこと。

以上の検証作業の結果として、従来の、『金々先生栄花夢』の誕生を境に草双紙を前後で二分したり、赤本を幼童向けと一括りしたりするような捉え方は事実即したのではなく、従来の常識に照らし合わせて各作品を注釈し、評価することは有効ではなく、現存する伝本に直接アプローチし、近世期の戯作者のフィルターを通さない、生の草双紙のあり様を明らかにすることが重要であることを改めて示す。

各章の構成は以下のとおりである。

第一章では赤本・黒本青本・黄表紙に関する従来の前提を確認した上で、現存資料の状況を整理する。特に赤本については、題材の範囲が多岐に亘っており、各時代の草双紙を端的に特徴づけているとされる性質のすべてを有していたともいえるため、幼童向けの昔話が主流とはいえないことを明示する。その上で、草創期において草双紙は既に江戸で生産・消費された地本としての性質を有しており、草双紙は基本的な

部分で一貫した性質を持ち合わせていたと想定されることを示す。

第二章では従来の文学史の最大の拠である大田南畝の『菊寿草』序文の言語遊戯の洒落言葉に関する記事について検証する。現存する赤本および黒本青本について、言語遊戯の用例の分布について調査した結果から、『菊寿草』序文の記事が草双紙全体に対して言及したものではなく、ごく限られた範囲への言及であること、それが後世に広く草双紙の世界全体の評価に結びついてしまったことを実証する。また、『菊寿草』序文の検証作業を通じて明らかになった、草双紙作中での言語遊戯の洒落言葉の使用状況から、草双紙の物語を執筆したのは、従来言われていた画工ではなく、板元毎に属した別の関係者と想定されることを示す。よって、初期草双紙の各作品へのアプローチとして、画工毎にストーリーの特性を探るという従来の方法が有効でないことを確認する。

第三章では鱗形屋板を例に挙げ、現存する黒本青本の悉皆調査によって、黒本青本の出板システムを検証する。新板目録の様式や掲載される画工の活動時期、各作品に盛り込まれた時事的情報などを整理することによって、鱗形屋板が新板に用いた題簽の変遷を示す。その上で、その基本的な様式の流れから外れる装丁を持つ伝本が再摺本であること、基本的な様式の題簽であっても、表紙や題簽に用いた料紙の色の組み合わせによって、初摺本と再摺本とに明確に分かれることを明らかにする。その上で、三田村本と呼ばれる、持ち主が草双紙に署名をしたために一群のものと分かる伝本を整理し、黒本青本の享受のあり様を探り、いわゆる黄表紙以前の草双紙が長きに亘って読書の対象となっていたことを明らかにし、「黒本青本の時代」「黄表紙の時代」のように、草双紙を分割することの有効性に限界があることを示す。

第四章では富川房信（吟雪）の作品を取り上げる。房信は宝暦から安永期まで活動し、幾つかの、ただし鱗形屋以外の板元から多くの草双紙を刊行した、黒本青本の代表的作者である。恋川春町のような新興の作家と比べると作品が類型的で稚拙であると評価されているが、物語の執筆と挿絵の両方を担当していた作家で、黄表紙誕生以

前の草双紙の様相を探るには最適な人物といえる。まず、黒本青本から黄表紙時代への移行期の著作を追うにあたって、その著作年譜を示す。その上で、幾つかの著作を取り上げ、それらがいわゆる黄表紙として評価の高い作品とは作風が異なるものの、それなりの創意工夫を持って作品を作っていたこと、長きに亘って精力的に板行されたのは、それらが読者や板元のニーズに合ったものだったことを確認する。

第五章ではいわゆる黒本青本の時代から黄表紙の時代への草双紙の展開を、いくつかのテーマに沿って、編年的に追う。まず、桃太郎を題材とする草双紙を年代順に追い、それらが、個々の趣向に差異はあるものの、人々にとってなじみ深かった題材をベースに、いかに読者の目を楽しませるかを狙っているという点で手法が共通していることを示す。後期の草双紙の中にも基本に忠実な作りのものもあり、読者が必ずしも諧謔性やうがちを草双紙に求めていた訳ではないことを示唆している。次に、天明期以降の草双紙の代表的作者である山東京伝の作品を取り上げる。京伝は春町ら武家階級の新しい作者の作品の影響を受けた作家で、その評価も高い。新興の作者たちによって草双紙が変質していくのにも対応し、新しいタイプの作品を器用に作っていたが、同時に黒本青本によくみられた趣向を長きに亘って積極的に作中に取り入れている。その姿勢は次々と新しい表現を試みた春町より、むしろ明和期の鱗形屋板や富川房信に近い印象を受ける。よって、新しいタイプの作品の登場は、草双紙の世界に少なからず刺激を与えた可能性はあるものの、基本的な流れとして、房信作品を好んだような読者の需要に応えたのは、京伝や、さらに後に多くの草双紙を手掛けた十返舎一九のような作家であったものと考えられる。黄表紙草創期以降、新興の草双紙作者や戯作者たちがいわば仲間内でもてはやされ、近代に名作として紹介されたような草双紙全体の中では特異な作品を基準に全ての草双紙を評価するのは、草双紙全体のあり方を探る上で有効な方法とはいえない。

本論文の末尾には、付録として、各章で取り上げた作品の影印・翻刻や、参考とする論考を付す。